

# 一九六〇年代安部公房文学の比較文学的研究：『砂の女』・『燃えつきた地図』・『内なる辺境』

大場, 健司

---

<https://hdl.handle.net/2324/4110576>

---

出版情報 : Kyushu University, 2020, 博士（学術）, 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



KYUSHU UNIVERSITY

氏名	大場健司			
論文名	一九六〇年代安部公房文学の比較文学的研究 ——『砂の女』・『燃えつきた地図』・『内なる辺境』——			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	波瀬剛
	副査	九州大学	教授	松本常彦
	副査	九州大学	准教授	西野常夫
	副査	九州大学	准教授	岡本太助
	副査	甲南大学	准教授	友田義行

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、一九六〇年代における安部公房の小説（『砂の女』、『燃えつきた地図』）とエッセイ（『内なる辺境』）に関して、「都市」と「アメリカ」という視点を軸にして、比較文学的に論じている。

本論は、第一部「脱アメリカの物語」（第一章・第二章）、第二部「アメリカ文学との相互交通」（第三章・第四章）、第三部「エッセイと同時代言説」（第五章・第六章）の三部から成る。

近年の研究は、『砂の女』までの作品、特に一九五〇年代の作品に注目し、政治運動や芸術運動の文脈から分析を試み、安部のマルクス主義思想や、対米民族主義に基づくナショナリズム的傾向を指摘してきた。しかしながら、日本共産党除名後の一九六〇年代、安部は排外的なナショナリズムへの批判を強めてゆき、一九六八年の段階では、「内なる辺境」などの一連のエッセイにおいてナショナリズムに対抗する都市像を提示している。本論文では、安部公房が提示した都市像の原型を、一九五〇年代における彼のアメリカ文学・文化に対する認識に求め、序章において、創作活動の初期からナショナリズムへの批判的な姿勢がみられることを指摘し、議論の前提を提示している。

そのうえで、第一章「砂の歌—安部公房『砂の女』とアメリカ文学の「辺境」—」では、長編小説『砂の女』に関して、同時代に日本で翻訳紹介されたポール・ボウルズ『極地の空』とT・S・エリオット『荒地』における辺境の描かれ方と対比することで、定着よりも流動に重きを置く主人公のノマド的な思考が明確になる点を指摘した。

第二章「穴の水脈—安部公房『砂の女』とポール・オースター『闇の中の男』」では、主人公が潜る穴をパラレル・ワールドとしてとらえ、そこから新たな自己を発見する「可能性」の文学として解釈し、さらに、二作品における家族像の違いを明らかにした。

第三章「「既成事実」からの失踪—安部公房『燃えつきた地図』とアメリカ文学の「都市」—」では、長編小説『燃えつきた地図』に関して、安部公房のアメリカ訪問及びアメリカ文学に対する言及を踏まえて、都市小説の先駆であるナサニエル・ホーリーの短編小説「ウェイクフィールド」と対比しながら、失踪者を通して示される都市の新たな人間像について考察した。

第四章「「ピカソの石版画」から「泣く女」—安部公房『燃えつきた地図』とポール・オースター『幽霊たち』—」では、ポール・オースターが安部公房の小説を読んだという言及に注目し、二作品の類似性を指摘したうえで、絵画や額縁を媒介として記述される都市風景や、家族関係の構築にみられる両者の違いを明らかにした。

第五章「生々しい素顔—安部公房「ミリタリィ・ルック」と軍服をめぐる同時代言説」では、エッセイ集『内なる辺境』に収録された「ミリタリィ・ルック」を対象として、ベトナム反戦運動のさなか、若者たちのあいだでアメリカの軍服に似た服装が流行した現象を、安部公房がパロディとしてとらえていたという視点から論じた。また、この評論においては、軍服をめぐって暗示的に三島由紀夫との応答がなされている点を指摘した。

第六章「SF的想像力と遊牧民—安部公房「異端のパスポート」と人類の起源一」では、エッセイ「異端のパスポート」を対象として、同時期に日本で上映された映画『二〇〇一年宇宙の旅』の冒頭に登場する人類進化のエピソードをふまえ、安部公房が遊牧民の移動性に国家という枠組みを相対化する「異端」の可能性を読み取っていた点を指摘し、「明治百年」に「内なる辺境」の思想が提唱された意義を明らかにした。

終章では、一九六〇年代における安部公房の文学と思想にみられるアナキズム的な特徴を結論づけ、今後の課題を示している。

この時期の安部公房の小説に関しては、これまででも都市化を経て新たに形成される人間関係の描かれ方に注目が集まってきた。それに対して、本論文は同時期のエッセイを視野に入れることで、ナショナリズムに対抗する都市像の提唱をより明確にした点で、当該領域の研究に対して大いに貢献したといえる。加えて、アメリカ文学との関係においては、安部公房のアメリカ文学・文化の受容だけでなく、現代アメリカ作家であるポール・オースターにおける安部公房文学の影響を指摘し、双向方向的に論じた点に独自性があるといえる。

用語の定義や、個々の作品における解釈、方法論などに関する改善点は残されているが、論文全体の水準を考慮するうえで大きく影響する程度ではなく、今後の活躍が期待される。

以上の理由から、本論文が博士（学術）の学位に値すると判断した。